

文 藝

山 清 じ

齋 藤 慎 吾

身延文庫古文書傳寫の爲、立正大學の派遣を以て吾れは昭和七年六月より同十年六月に及ぶ
滿三ヶ年を身延山久遠寺に淨居しき。

1 山 寺 元 旦

靄もや白く罩こめてひそまる山々の尾根おねをし見れば明け動きつつ
禮らい法ほつ華け一會いちご無言の座に燃えて燭しよくはかすかに音たててをり
讀よみなれし法華經なれど文もん々の韻ひんは深く今朝の身に沁む
そそりたつ杉の秀はむらの真白雪山やまはさやかに明け放れたり
鳥が鳴く常陸の國のふるさとを一目ひとめわが見む山いただきに
山頂に立ちてはるかに老いらくの父母ことほげば涙ぐまじき
元日はしづかに過ぎぬまなかひに富士大きくぞ夕かげり來し

2 山 中 淨 居

朝夕の勤めさびしく身を置きて淨らに住めば心安けし

本讀みに疲れたる眼を窺たの邃か見放ちければ赤き南天
 老樹はつかに支へて疎そなり白梅の花すがと朝霞せり
 小雀ら飛び立つなべに杉山の花粉流れて陽にけぶる見ゆ
 咲き光る鬱う金こん櫻ぎんの花の搖れいのち思へばさびしきものを
 さるすべりしんみりと紅あかし朝じめる庭の木の間の茅か蜩たのこゑ
 山まゐりの人らゆくゆくうつ太鼓ひびきは高く天に牙やえたり

3 山を下る

身延にて朽ちむぞよしと思ひにき仰ぐ高嶺たかは今日も雲ゆく
 うつしみの吾がいこふべきところなしひそかに出でて山を仰ぐも
 卑怯なるインテリの性さがは陰にして同僚どうおとしいれ己れ生きむとす(在京)
 幼きゆただに勵みて薄命はくめいのままに吾が生なは終るならむか

4 元朝登詣

窓近くひびく川音明けそめし空かと見れば月傾きぬ
 山々の迫る峽間かひにおりたちぬうつともなし照るおぼろ月
 杉の秀はの霜やけなごみしづかななる北へ身延の嶺ねろつづきたり
 眼を閉ぢて思へば見えしこの山の晨あしたの庭に今われは立つ